



魅力だより

- ◆最上教育事務所「魅力ある学校づくり調査研究事業」通信第11号
- ◆令和2年11月12日（木）
- ◆最上教育事務所 指導課

魅力ある学校づくり
調査研究事業

第2回ワーキンググループ

令和2年10月23日（金）
会場：最上総合支庁203会議室

大阪成蹊短期大学教授（前国立教育政策研究所総括研究官）

中野 澄 氏からの指導・助言

演題 「小中連携を進化させる『のりしろ』の意義
～期間限定の小学7年生を創出するために～」



★なぜ、小中連携が必要か

□多くの学校において、中学校1年生7月の「子どもの声調査」では、3月に比べて「あてはまる」の数値が大きく減少しやすい。

→最高学年から新入生にかかわること、学校の雰囲気や決まり、プレーヤー（＝教師）がかかわること等により、これまで抱いていた期待が疲労となり、新規不登校が発生しやすい。

★「場の変化」を利用しながら、小学校の思い出を中学校生活で蘇らせる

□これまで弱点と考えられていた「場の変化」を小中の教師が手を組んで利用すること。

→例えば、多くの子ども達が小学校時代に一生懸命取り組んだことを中学校で復活させる。「これで最後か・・・。」を「中学校でまたやれるんだ。うれしいな！」という思いに高めていく。

□「器は中学校、中身は小学校」のイメージで、1学期間限定で小学校時代の取組を生かすこと。

→キーワードは「ワクワク、ドキドキ」。生徒が「先生は何でそんなこと知っているの!？」と思うようなことを仕掛けること。

例えば、卒業前に児童に「中学生になったらこんなことをしたい」という作文を書かせる。その作文を中学校の先生が引継ぎ、折に触れて活用する。

□「のりしろ」づくりは、プレーヤーが変わるため教師主導で計画的に取り組むこと。

→成功させるためには小中学校間の情報共有が不可欠である。小学校側から「児童たちの到達具合（ここまで取り組んでいる。こんなことまでできる。）」等を引継ぎ、小中学校間の様々な段差をなくしていくことが一番の「のりしろ」づくりである。

□学校を支えている（真ん中の）生徒を大事にしながら、これまでの取組を見直して取り組むこと。

→ぶれずにまじめに学校生活を送っている生徒を常に意識した取組が大事である。「君たちがコツコツと小学校時代に取り組んできたことを知っているよ」というメッセージを送り続けることが大事である。

「のりしろ」はリピート！生徒を「ワクワク」「ドキドキ」させよう！

参加者の感想

- ◆ ワーキンググループで各学校の先生方と話し合うことができよかったです。また、これまではリセットということ伝えていましたが、中野先生からリピートという視点を教えていただきありがたかったです。(小学校教諭)
- ◆ 中学校1年生での「ワクワク」「ドキドキ」をねらって、小学校6年生時にサプライズの準備をしてみたいと思いました。「のりしろ」を大切にしていきたいです。目立つ子だけでなく、いわゆるその他大勢をしっかりと見つめていきたいと感じました。(小学校教諭)
- ◆ 小中の「のりしろ」ということで、どのような内容なのか関心がありました。小中の連携と考えていましたが、生徒の「ワクワク」を引き出すような工夫が必要だということが分かりました。(中学校教諭)
- ◆ 「のりしろ」についてのねらいや取組について、自分の中で分からないことがたくさんありましたが、中野先生の講義や協議を通して理解することができました。切れ目のない支援や小学校で行ってきた活動を振り返ることが大事であることを学んだので、これから生かしていきたいです。(中学校教諭)
- ◆ 小中連携を進化させる「のりしろ」という考えが面白かったです。リセットではなく、リピートの重要性や器は中学校でも中身は小学校という話はなるほどと思いました。中学校で取り組むことに、小学校で取り組んできたことを加えることは難しくないことだと思いました。(教育委員会)

今後の予定

◆ 第3回ワーキンググループ

- 日時：令和3年1月14日(木) 14:00~
- 会場：最上総合支庁5階講堂
- 講師：国立教育政策研究所 小野憲総括研究官
- 内容：小中連携による「のりしろ」づくり等に係る講義及び協議(予定)



フレイバック

心にとどめたい言葉#3

国立教育政策研究所 教育課程研究センター

長田 徹 教育課程調査官

【令和元年8月22日】

- ★ やる気を引き出すために、児童生徒に意思決定させよう！
- ★ 将来との関連性を見据えた授業を実践しよう！
- ★ 教科の授業の中でこそ「生徒指導」を！
- ★ 活力ある社会の構築する人と出会わせよう！
- ★ 学活を通して「体験活動」「教科指導」「生徒指導」をつなごう！
- ★ 児童生徒と日常の対話の中で轍づくりをしよう！



心にとどめたい言葉#4

大阪成蹊短期大学

中野 澄 教授

【令和元年9月3日】

- ★ 「魅力ある学校づくり調査研究事業」は100人の子どもがいた場合、90人に対する取組である！
- ★ 100人中90人の子どもも大事にしていこう！
- ★ 「チーム学校プラン」はねらいを持って作成すること！
- ★ 小中連携の中で小学校から中学校へ「集団のアセスメント」も引き継ごう！
- ★ 魅力事業を通して、学校づくりに参画していこう！





Aグループ ※敬称略

- ・佐藤 誠 (萩野学園) 司会、発表
- ・中嶋 惇 (新庄小)
- ・佐藤 寛之 (新庄中)
- ・小野 美和子 (金山中)
- ・三上 準一 (金山町)



Bグループ ※敬称略

- ・佐藤 純 (明倫中) 司会
- ・栗田 行基 (最上中) 発表
- ・菊地 晃 (沼田小)
- ・成田 徹 (日新中)
- ・佐藤 雅彦 (最上町)



Cグループ ※敬称略

- ・矢口 功 (戸沢中) 司会、発表
- ・庄司 誠 (八向中)
- ・伊豆田 文子 (舟形小)
- ・渡辺 正 (舟形町)



協議用 memo

協議 (15:00~16:00) 「各中学校区で行う『のりしろ』づくりの可能性を考える」

☆シミュレーション☆ 11月から3月に行う『のりしろ』をどうデザインするか。

活動名	目的	小学校側の関わり	中学校側の関わり
11月 2人組合唱			
12月 小中交流 新入生説明会			
1月 書き初め 新年の挨拶			① 入学後4月に振替用紙を添えて 7月か10月か(2学期)に引き継ぎ ② 写真・イラスト・詩 映像 写真集
2月 ① 児童会引き継ぎ ② 授業制作 ③ 書き初め発表			③ 学年生徒会(組織) (小の運営会を中心) 1学期の振り返りをする
3月 ④ 新年の挨拶(合唱、紙芝居) ⑤ 児童会活動			④ 宿泊学習・学年集会等で発表 ⑤ 絵巻制作(1枚1枚) ⑥ 学習支援と活用できる内容にする ⑦ JRC

○作成した際のポイント○ 7月か10月か引き継ぎをする。

作成するにあたって難しかったこと
小学校の教師が手配がない。

【Aグループ】

＜中野先生からの指導助言＞

- ・Aグループの取組は、みんなで楽しもうというやり方がよい。
- ・小中で集まって話し合うこと自体が「のりしろ」づくりである。
- ・1月の「書き初め」の際に書いたものを、中学校側に引き継ぎ、中学校入学後の学年生徒会等で、小学校時代の気持ちを忘れないように活用すると、「ワクワク」「ドキドキ」につながるのではないかな。

協議用 memo

協議 (15:00~16:00) 「各中学校区で行う『のりしろ』づくりの可能性を考える」

☆シミュレーション☆ 11月から3月に行う『のりしろ』をどうデザインするか。

活動名	目的	小学校側の関わり	中学校側の関わり
11月			
12月 入学説明会	中学校の様子を知る	行事の1か月準備活動 生徒会 Ex: 生徒会まつり運動 のイベント 生徒の紹介ビデオ 国一表 1学期の振り返り	
1月			
2月 夢交流	小6と中2の交流	4月の自己紹介・掲示物 夏の放送	
3月 生徒会・児童会交流 卒業式・送別会・感謝会	交流 感謝 成長した姿を伝える	同じである安心感	

○作成した際のポイント○ 繋がることの重要性

作成するにあたって難しかったこと
行事から発展する機会が少ない

【Bグループ】

＜中野先生からの指導助言＞

- ・Bグループは、生徒会のあいさつ運動時のハイタッチや黒板のチョークの色の統一等、日常の取組を大事にしている。これらができていれば中学校1年時の7月の「子どもの声調査」は下がらないだろう。
- ・もし、下がったならその他大勢が下がっているということであるため、教師が過信していると捉え、取組を見直すことが必要である。

協議用 memo

協議 (15:00~16:00) 「各中学校区で行う『のりしろ』づくりの可能性を考える」

☆シミュレーション☆ 11月から3月に行う『のりしろ』をどうデザインするか。

活動名	目的	小学校側の関わり	中学校側の関わり
11月 校外学習 学習発表会(合唱発表会) (生徒発表会)			7月か10月に小学校で取り継ぎ してやる(生徒会)
12月 協力的研究(授業作り) 中1説明会	お互いの様子を知る	授業や部活動での関わり 中の先生か、中の授業を行う(4月) 小中の異業・生徒の交流	
1月			
2月 児童会・生徒会活動(イベント) お楽しみ活動 同じ年・中の活動(行事) (発表会・合唱発表会)	小中(同じ)活動を行う	学習会の開催(1学期)——中の先生か、中の先生か 小中合同の活動(児童会・生徒会)	
3月 6年生を送る会			

○作成した際のポイント○ 小6で行ったことを中学校でどうつながるのか、大切

作成するにあたって難しかったこと
学校の形が固定

【Cグループ】

＜中野先生からの指導助言＞

- ・Cグループの取組は、システムとしては間違いがない。
- ・「ワクワク」や「ドキドキ」を生徒に感じてもらうためには、「何のためにやっているか」「やっているつもりになっていないか」等を考えることが大事である。
- ・場の変化を利用し、「そんなことを中学校の先生は知っているわけがない」と生徒が思うようなことを仕掛けること。

小から中への場の変化を利用しよう!